春闘勝利団結ソフトボール大会。まず、宮浦・港務両指導部チームの対戦で開幕のあいさつ。だが無念、試合途中で雨が……。

春闘勝利団結ソ球大会

雨に流れて無念

「ケリはつけるゾ」と決意

四月二十七日、三池労組が春闘への決意をこめて開催した〝春闘勝利団結ソフトボール大会〟。場所は新港グラウンド。各指導部からそれぞれ編成したチームがいきおいこんでかけつける。

「こんなときこそ、腕前を見せなければ」と、執行部も。春闘へ燃える決意が決起させたのだ。

朝九時、まず宮浦指導部と港務指導部の両チームの対戦でいよいよ試合開始。

両方に分れた応援のなかまの声援を背に、見事な熱戦を展開。とんでもないミスがあるかと思えば、うならせるファインプレーもあり、拍手また拍手。そこに雨でドロンゲームとは無念だったが、「このケリは必ずつけるゾ」と決意は固かった。

日ごと現場に加わる重労働

犠牲の強制はやめよ

不安広がり、怒りの声が

今三井三池では全鉱で人手不足がきわ立っている。特に有明炭鉱の出炭が本格化するにつれ、やがて閉山が確実視されている宮浦鉱から出向が打ち続き、重労働は日を追って加わっている。「去るも地獄残るも地獄」の言葉通りで、すべてが働く者の犠牲にされている状態。今や各職場に不安が広がり、働く者への犠牲は絶対反対の声が強まっている。

働く者に絶えぬ不安が……

宮浦・南新開から

三月の中旬頃になって、急に有明炭鉱への出向の話が、南新開竪坑にも持ち込まれてきました。

南新開にまでは影響はないものとほとんどの人が思っていたらしく、少なからぬ人びとの間に動揺が起こりました。

十名の割当が来たらしいが、結果的には機械工を中心に七名の人が、出向に決まりました。

ひと頃は随分とにぎやかだった南新開竪坑も、二、三人欠勤すればまるで火が消えたようです。

作業の面も、大変です。なかでも排水関係は、若手から五名の人が出向してしまったので、その翌日からさっそく作業の段取りができず、竪坑関係の方から二人の人が、臨時に繰り込まれる状態が出て来たり。保線の方も車道関係をいままで三名でやっていたのが、二名になったり。

通気の方もいままで常時一名の応援がありましたが、その人もその排水の方にひきあげられたりしています。

また宮浦鉱の百八十メートル坑道と有明鉱を結ぶベルトコンベヤー坑道は、急ピッチの作業が進められ、掘進工（組の人たち）は毎日のように残業させられ、現在の作業速度は、一日平均七メートルの延びだとのことです。

宮浦鉱の閉山も近づいてきましたが、南新開竪坑に働く人は閉山後の取り扱いや、有明炭鉱への坑道の貫通後の人員移動の問題などで心配はたえません。

だれでもそうですが職場にも馴れ、人間関係もできたところを離れたくないのが人情です。

いずれにしても、会社の一方的な、勝手な配転には反対です。

×

右は宮浦指導部保線・通気分会の新聞〝ポイント〟（第三八号）から。

素晴らしい一日だった

故久保さんの追悼も忘れず文化祭

四山指導部　南場　勇

四山指導部の文化祭は天気が心配でしたが、絶好の日和となり、午前中はソフトボール大会でした。

地域分会別の対抗試合で、組合員・主婦会員・子供と、和気あいあいの中で、好プレー、珍プレーの続出で、しかも優勝戦は接戦の末引き分けとなり、ジャンケンできめる一場面もあり大盛況を呈しました。

作品展示会も、生花、盆栽は、指導部に入るとすぐ見ごとなできばえが目に止まり、日頃の腕前にびっくりしました。

二階には子供の作品、組合員や主婦会員の書、写真、手芸等、きびしい日常の労働・生活の中から、少しでも心のゆとり、豊かさを持ちたい願いからこそできたのだと思いました。

また、三池闘争時の記念品を見て、当時のさまざまのことが思いだされ胸が一ぱいになりました。

午後から指導部前の広場で、久保清さん（三池闘争のとき、一暴漢のあいくちで刺され死亡した人）の十七周年忌追悼集会。生命を守り、七七春闘勝利のため闘うことを意志統一し、バザー部では主婦会腕自慢の味の見せどころで〝やきとり・おでんコーナー〟に「うまい、うまい」の連発。大繁盛でした。

バザーのため主婦会の皆さんは前日より買い出し、下ごしらえと大変だったと思います。

宝くじコーナーもあり、「ハテ何が当たるかな」と楽しみ、それにきき酒大会も行なわれ、普段あまり飲まない人が返ってきき当てたようでした。

みんなでうたった合唱、前週行なわれていた囲碁・将棋、その日行なわれたソフトボール大会の表彰など、団結し、緊張した心の中に、いいしれぬなごやかさもありました。

みんなで討議し、みんなでつくりだすことのできた四山指導部文化祭。すばらしい一日だったと思います。

指導部長はじめ、実行委員の皆さま本当にご苦労さまでした。

働く者は将棋の歩か……

三川・電気から

三川鉱の坑内電気では人員不足が問題で、それを解消（合理化）するためか、会社はいろんなことをやりはじめています。

今まで本線だった通信と重工を現場に働く者の意志を無視して統合、斜坑から電車に、電車から斜坑に応援を出すことが続いており、現場では不安がっています。ゆくゆく、働く者を将棋の歩のように動かすための地ならしでしょう。

会社は人員不足を働く者の犠牲で補う方向でなく、増員し、緊急の作業以外はあくまで本人本来の作業にすべきです。

×

右は三川指導部八分会新聞〝カンテラ〟（第一号）から。

北から南から

春闘つぶしの合理化攻撃か

春闘はかくべつ中小企業労働者にきびしく、全硝労山村硝子労組相模原支部（神奈川県相模原市大山町三番四五号）は、首切り合理化を粉砕する闘いをすすめている。

会社提案によれば現行人員の百六十四人を百四十二人に減らそうというもので、減員計画のなかには、夏場など機械の前に六時間以上は立っていることで困難な職場からさえ、人を削ろうとしているという。

これに対し同労組相模原支部は「春闘つぶしをねらった合理化だ」として、逆に会社の体質改善を要求する提案を行ない、「労働者にのみ犠牲を強いる行為は許さぬ」と、実力行使を含めながらがんばっている。

重荷背負い坂道登る思いで

山野炭鉱遺族会（福岡県嘉穂郡稲築町平中籠七一〇）は、逐次会員をふやしながら着実な歩みを続けている。裁判闘争の準備ばかりでなく、広く交流を求めながらそれぞれの経験から学び、闘いの輪を広げている。

会員の一人――足立さかえさんは、同遺族会の機関紙〝やまの遺族会だより〟（第一一号）に、次の一文を寄せている。

「ガス大爆発事故（四十年六月一日。死者二百三十七人、重軽傷者三十三人）で突然大切な主人をうばわれ、果然として泣きあかした日々を忘れることはできません。

皆々様の親切でどうにか立ち上がり、子供達の成長を楽しみに頑張りました。重荷を背負って登る坂道のような十三年間でしたが、苦しいにつけ楽しいにつけ、主人が生きていたら、といつまでたっても忘れることができません。二百三十七名の霊を慰めるためにも、遺族一同力を合わせて頑張りましょう」

心から前進を祈ろう。

港湾労働者に年金が……

今、港湾労働者年金受給のための登録が始まっている。福岡県民春闘共闘会議と全国港湾労組は連名で、「一人ももれなく登録を」と呼びかけている。

港湾労働者年金は、港に働く労働者の老後の生活安定をめざす産業別の年金制度。労働者は無拠出で、一定の受給資格年数に満てば退職後支給される仕組。

三池港務所の所定の職種にも適用されるべきで、港湾労組の長年にわたる闘いの成果である。

山野炭鉱遺族会のパンフレット。努力の結晶だ。